令和５年
9
No.102

# 寺子屋だより

※題字／森川芳聲

碑のこころ

ヴクトリア女王像

「西オーストラリア州パース市キングスパーク」

※詳しい解説は12頁に掲載しています

## もくじ

2 巻頭言『巻頭言を読み返す（完）』… 山口　秀範
3 教育雑感⑦……白濱　裕
4 偉人レポート……髙見澤　玉江
6 橋を架ける③……占部　賢志
8 SKYキャッスル……水崎　之子
9 やっぱり神様が好き（第二回）…元木　哲三
10 TERAKOYAふぉとれぽーと
11 〝あちこちde寺子屋〟のご案内
12 碑のこころ（7）　編集余録

巻頭言

# 巻頭言を読み返す（完）

代表世話役　山口 秀範

承前　「寺子屋だより」第一〇〇号までの後半（五〇号以降）は、次第に「志明館」の進捗が巻頭言を賑わすようになります。平成二十六年三月の発起人会発足が具現化への大きな一歩でした。

**「小中一貫校の開設に向けて」（五十二号・平成二十六年五月）（発起人会趣意書の冒頭）**

私たちは、次の三点が現代日本を覆っていることに深刻な憂慮を抱いています。

①自己肯定意識（自分の帰属する家族・地域・国への誇り）の希薄さ

②公のために尽くす使命感（世のため人のためという志）の欠如

③困難・逆境に立ち向かう気魄・勇気（心身の逞しさ）を培う機会の少なさ

少子高齢化が加速する状況下、将来に向けて日本が世界の真のリーダーとなれるか否かは、今後の国民教育の充実如何にかかっており、子供の頃から強靭な心身と高い志を育成する教育機関が今こそ求められています。

今から十五年前に博多学園八尋太郎氏と意気投合した処から実現を目ざし続けて来た小学校新設のプロジェクトは、当時の宗像市長からの誘致意向を受けて一気に進展して上記の発起人会設立に至ったのですが、諸事情により頓挫。その間にも学校の理念・カリキュラム・特徴ある教育内容等について検討が続けられました。

上記の三点は全く新しい小中学校を作るという素志の原点です。かつて私が訪れた国々の子供たちは、例えどんなに貧しくとも自分の生まれた環境を肯定しつつ楽天的に暮らしていました。それに比して「自分に自信がなく、何の役にも立たないと感じながら生きている」日本の若者の割合が突出しているのは大問題ではありませんか。

そうした自己肯定感の欠如は、長く豊かな自国の歴史をありのままに教えずに来たことに遠因があるでしょう。この世に生まれた一人一人が役割を担っており、その実現のため自分に何が出来るかと自問しつつ志を磨く機会の無さも、子供たちの元気の発露を妨げているようです。

「逆境」の克服は偉人たちの成長に欠かせない要素ですが、現代の子供たちに逆境を与えることは至難の業と化しています。すべては大人がお膳立てをして躓かせない、困らせないように仕向ける風潮の中で、せめて学校ではなるべく教えない、失敗を経験させて自力で迷路の出口にたどり着く習慣を身につけさせたいものです。

何事も初等教育から手を付けねば、としみじみ思い続けながら開校地決定までの紆余曲折を乗り切ってきました。

**「小中一貫校の開設に向けて」（六十四号・平成二十八年五月）**

美しい日本語を身につけ知徳体に秀で、公に向かう志を立てた少年少女たちは、やがて世界の未来を動かす国際派日本人へと大成してくれるに違いありません。そしてこの志明館教育が、日本の国家百年の計・教育を再生することを疑いません。

その後「金印の島」志賀島での開設に希望を燃やした時期もありましたが、最終的に北九州市の公立小学校統廃合跡地を入札で獲得し、来春開校へと漕ぎつけました。

「志明館」が上記のように将来の日本を革新する大きな一歩になると自負しつつ、準備に邁進しています。

**「志明館サマースクール」（七十九号・令和元年十月）**

サマースクール初日に自己紹介を促しました。何と、三分の一ほどが「出来ない」、「恥ずかしい」、「したくない」と言い続けたのです。しかもそれが一年生よりも二・三年生に多かったことから、小学校の教育が問われます。（幼稚園児は概ね、はきはきと答えるのです）

戦国時代の終り頃来日したポルトガルの宣教師ルイス・フロイスの残した『日欧文化比較』の一節が思い出されます。

ヨーロッパの子供は青年になってもなほ使者となることはできない。日本の子供は十歳でも、それをはたす判断と思慮において、五十歳にも見られる。

われくの子供は、大抵公開の演技の中ではにかむ。日本の子供は恥づかしがらず、のびくしてゐて、愛嬌がある。そして演ずるところは実に堂々としてゐる。

いつの頃からか特に初等教育は「横並び」で、「出る杭」を制するようになっているのです。四百数十年前の日本の子供が「堂々としている」と評価されていたのですから、その姿を取り戻すためにも、志明館の掲げる「しなやかにとがれ」の実現は急務です。

**「志明館」開校への正念場」（八十九号・令和三年七月）**

五十年先、百年先の日本と世界の姿を夢想することがあります。環境やエネルギー危機を克服し、最先端の科学技術を駆使しつつ人々は共存し豊かさを実感出来ているでしょうか。貧困と格差が増大して争いの絶えない地球かもしれません。

どちらに転ぶとしても、日本は日本であり続け、願わくは我が国が、明るい世界を築くリーダー役を務めていて欲しい。

この願いが叶うか否かは、これからの人作りに係っています。世のため人のためという利他的志を立て、日本の心を湛えつつ世界を動かす人財の卵を輩出する、そんな志明館の誕生までもう一歩です。

十月中旬に入学願書（来春小学一・二年生）の受付開始です。その後奨学金ファンド募集なども実施します。読者各位の応援を何卒よろしくお願いします。